発音練習課題が、英語発話行動の積極性に及ぼす影響Ⅱ

—感想データによる質的検討—

○遠藤 健治¹・佐賀 ゆりえ²(青山学院大学¹・青山学院大学大学院²)

キーワード: 発音, Willingness to Communicate(WTC), ICT

The effect of pronunciation practice on Willingness to Communicate in English : The qualitative study by examining impressions

Kenji Endo¹ and Yurie Saga²(Aoyama Gakuin University¹, Aoyama Gakuin University Graduate school²)

Key Words : Pronunciation, Willingness to Communicate(WTC), ICT

問題

Horwitz, Horwitz, & Cope (1986) が提唱した外国語不安の概念と、WTC (Willingness to Communicate) のモデル (MacIntyre, Dörnyei, Clément & Noels, 1998) を元に、本研究Ⅰでは英語発話行動の説明モデルの検討を行った。説明モデルでは、英語運用能力の認知を起点に、対人的評価懸念、英語発話行動の抵抗意識を経て、発話行動が抑制されることが示唆された。特に発音に関する他者からの評価懸念が発話行動により大きく影響するため、これを軽減させることが発話行動の促進につながるという。

授業時を含め、他者評価によって学習者は不安を覚え、発話行動練習は抑制されるが、他者の存在の無い、客観的な評価が練習時の不安に及ぼす影響はより少ないと考えられる。本研究では、客観的な評価を下すツールとしてスマートフォンなどのICT技術を利用した。本研究では、ICTを利用した練習課題を設定し、個人で練習することが、発話行動の積極性と外国語不安にどのような影響を及ぼすのかを検討した。

方法

本研究は、大学の『人を対象とする研究に関する倫理審査委員会』と本学学長の承認を得た上で実施した。大学生56名(女性49名・男性6名・その他1名、平均年齢=19.89歳(SD=1.58))が参加し、研究の途中辞退は可能であり、辞退につき不利益は生じないことを説明した。【使用機材等】質問紙(研究Ⅰと同様のもの)、ノートパソコン(VAIO: VJS111D11N)、ヘッドセット(XIBERIA V10)、練習あり群用の記録用紙を使用した。記録用紙には、練習課題の感想を記録する欄と課題実施時間などの記入欄を作成した。【使用アプリケーション】測定、練習課題用に、英語スピーキングシステムELST (株) サインウェーブ、以下ELST)を採用した。このアプリケーションはパソコン、スマートフォン(iOS, Android)に対応しており、どの学習者も平等に学習できるため採用した。ELSTに内蔵されている「発音記号」の練習を中心に、3~4週間の練習課題を構成した。【手続き】実験参加者1人につき、2回実験を行った。【測定方法】ELSTを入れたノートパソコンにヘッドセットを接続し、ELSTに内蔵されたスピーキングテスト機能を使用した。【実験1回目】実験内容の確認と同意後、質問紙の回答と、測定用ソフトで測定を行った。測定終了後、練習あり群の学生(31名)には練習アプリケーションのインストールと練習課題の実施(1日15分以上)を指示した。また、練習課題の感想を記録用紙に記入することも指示した。【実験2回目】1回目と同様に、質問紙の回答と測定を行い、謝礼を渡した。

結果

本研究では「練習課題から2回目の実験で得た気付き」を主眼に、SPSS Text Analyticsを用いて、練習あり群の学生の感想データの分析を行った。どのカテゴリにも該当しない2名の感想データを除外した、29名分のデータを分析した。感想

データから【ELSTの評価(13名/29名)】、【練習課題の評価(14名/29名)】、【学習意識の向上(25名/29名)】、【抵抗感の軽減(7名/29名)】の4つのカテゴリが抽出された。【抵抗感の軽減】を報告した感想データからは、発音の再学習によって自己の英語運用能力の向上に気付く(【スキルアップの気付き(カテゴリ: 学習意識の向上)】)ことで、実力を試す意欲や期待が生まれた状態である、【自己への期待(カテゴリ: 学習意識の向上)】に関する報告が得られた。練習課題を継続した結果「できるだけ話してみようと思えるようになった」などが報告され、これらから練習課題による英語の発音改善と抵抗感の減少が示唆された。

考察

本研究では、ICT技術を活用することで他者評価を排した状況を作り出し、その状況かでの練習課題が発話行動の積極性に与える影響を検討した。練習あり群の学生からは、発話行動に対する抵抗感の軽減や、発話行動の報告が得られた。抵抗感の軽減や積極性の向上に至るまでのプロセスは、発音練習による英語運用能力向上の気付きによって、練習課題を繰り返し、英語運用に対する自信を高め、実際の発話が可能になるというものだった。

以上から、他者からのネガティブな評価を受けないという安心感による、コミュニケーション上の積極的態度を学習者は得たと考えられる。先行研究で報告されてきた、発音への不安を軽減することでWTCの向上が見られたというプロセスと、本研究で報告されたプロセスは一致している。WTCは自発的にコミュニケーションを行う意思であることから、学習者の内的な状態とも言える。個人で練習を行うことは、自己への自信や効力感を高める点で、WTCには効果があると考えられる。

しかし本研究Ⅰで示された説明モデルと異なり、注目場面や、発話の先取り不安のような対人的評価懸念の軽減に関連するプロセス及びカテゴリは抽出されなかった。以上のことから、WTC、外国語不安、発音の関連を示す説明モデルの再構築が求められる。

謝辞

本研究で使用した英語スピーキングシステムELSTを提供していただいた、(株)サインウェーブに感謝の意を表する。

文献

Horwitz, E. K., Horwitz, M. B. & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70, 125-132.
MacIntyre, P. D., Dörnyei, Z., Clément, R., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation. *The modern language Journal*, 82 (4), 545-562.